

## 黄表紙の準体法

田上 稔

### はじめに

前三稿<sup>(注1)</sup>において、洒落本を対象として調査を行い、近世後期における準体法の有様を、分析した。分析に際して、「同一名詞連体」「制限用法」「内の関係」等々の呼称をもって、ほぼ意味されている構造を「A」群、「同格連体」「非制限用法」「外の関係」等々の呼称で、ほぼ意味されている構造に、山田孝雄氏の「用言が名詞の資格をうる種々の段階」の内の「第四」<sup>(注2)</sup>、「事物の状態動作等を一の事実として之れを概念的に取扱ふもの」<sup>(注2)</sup>に、ほぼ相当する準体句構造を含めたものを「B」群として、まず、連体装定構制の異なりに応じて、大きく二つに分類した<sup>(注3)</sup>。その上で、そのAB両群の準体法が、連体形準体法、助詞「の」による準体法の出現状況と、どのように関連し、また、推移するのかが、分析した結果を、報告しておいた。

その結果、明和安永年間から文化年間以降へと、概略的な傾向として、動詞連体形と助動詞連体形において、A群の準体法よりも、B群の準体法の割合が増し、かつ、連体形準体法によるものよりも、助詞「の」による準体法の割合が増

していた。ただし、その変化は、特に寛政年間と文化年間以降との間で、かなり緩やかなものでしかなかった。

また、形容詞・形容動詞用例において、助詞「の」による準体法よりも連体形準体法によるものの割合が増す現象が、明和安永年間から寛政年間へと、観察されたけれど、文化年間以降は、再び、連体形準体法よりも助詞「の」準体法の割合が増すという結果になり、更に検討するべき問題を、多く残してしまっていた。

本稿では、前三稿に、更に、引き続き関心のもと、安永年間から享和年間までの、所謂黄表紙を対象として、その準体法の振る舞いについて少しく調査した結果を、報告しようと思う。

一

今回の調査の対象としたテキストは、近代日本文学大系『黄表紙集』、日本名著全集『黄表紙廿五種』、古典文庫『黄表紙集』一及び二、岩波日本古典文学大系『黄表紙洒落本集』、小学館日本文学全集『黄表紙川柳狂歌』に収められたものから、次の通りの作品を、選択した。年代順に記しておく。<sup>(注4)</sup>

- 安永年間 『金々先生栄花夢』(安永四年) 『高慢齋行脚日記』(安永五年) 『うどんそば化物大江山』(安永五年)  
『古今名筆其返報怪談』(安永五年) 『鼻峯高慢男』(安永六年) 『敵討女鉢木』(安永六年) 『桃太郎後日咄』(安永六年) 『親敵討腹鼓』(安永六年) 『辞闘戦新根』(安永七年) 『三幅対紫曾我』(安永七年)  
『楠無益委記』(安永八年) 『怪談豆人形』(安永八年) 『金銀先生再寝夢』(安永八年) 『案内手本通人蔵』(安永八年) 『善光寺御利生通鼻寝子の美女』(安永九年) 『扱化狐通人』(安永九年) 『近頃島めぐり』(安永九年) 『憎口返答返』(安永九年) 『本の能見世物』(安永九年) 『大通天皇野暮親王誤欺大和功』(安永九年)  
天明年間 『鐘入七人化粧瀧返柳黒髪』(天明元年) 『当世大通佛買帳』(天明元年) 『通一声女暫』(天明元年) 『息

子妙薬一粒萬金談』(天明元年) 『四天王大通仕立』(天明元年) 『通増安宅関』(天明元年) 『栄花程五十年  
 蕎麦値五十銭見徳一炊夢』(天明元年) 『昔男を写して通風伊勢物語』(天明二年) 『夫れは小倉山是れは鎌  
 倉山景清百人一首』(天明二年) 『手前勝手御存商売物』(天明二年) 『思ひ付いたり替つたり五郎兵衛商売』  
 (天明三年) 『右通慥而啞多雁取帳』(天明三年) 『長生見度記』(天明三年) 『夫従以来記』(天明四年)  
 『歳々花似当年積而八代目桃太郎』(天明四年) 『漢國無体此奴和日本』(天明四年) 『狂言好野暮大名』(天  
 明四年) 『其ハ本歌是ハ狂哥萬載集著微来歴』(天明四年) 『吉原大通会』(天明四年) 『其昔龍神噂』(天明  
 四年) 『太平記万人講釈』(天明四年) 『御手料理御知而已大悲千録本』(天明五年) 『順廻能名代家莫切自根  
 金生木』(天明五年) 『元利安売鋸商内』(天明五年) 『江戸生艶氣樺燒』(天明五年) 『鳩八幡豆と徳利』  
 (天明六年) 『新建立忠臣蔵天道大福帳』(天明六年) 『色男十人三文』(天明七年) 『面向不背御年玉』(天  
 明七年) 『亀山人家妖』(天明七年) 『悦最肩蝦夷押領』(天明八年)  
 『復讎後祭祀』(天明八年) 『仁田四郎富士之人穴見物』(天明八年)  
 寛政年間 『天下一面鏡梅鉢』(寛政元年) 『孔子縞于時藍染』(寛政元年) 『地獄一面照子浄頗梨』(寛政元年) 『願  
 解而下紐哉拝寿仁王参』(寛政元年) 『鸚鵡返文武二道』(寛政元年) 『大極上請合薬心学早染草』(寛政二  
 年) 『京傳憂世之醉醒』(寛政二年) 『即席耳学問』(寛政二年) 『遊妓寔卵角文字』(寛政二年) 『壬生狂言  
 唐本寝言直読見臺萩』(寛政三年) 『世上洒落見繪図』(寛政三年) 『京鹿の子娘鯨汁』(寛政三年) 『二十日  
 餘四十両尽用而二分狂言』(寛政三年) 『盧生夢魂其前日』(寛政三年) 『馬鹿長命子氣物語』(寛政三年)  
 『浮世操九面十面』(寛政四年) 『昔々桃太郎発端話説』(寛政四年) 『長物語後篇白髭明神御渡申』(寛政五  
 年) 『十四傾城腹之内』(寛政五年) 『栄花夢後日咄金々先生造化夢』(寛政六年) 『天道浮世出星操』(寛政

六年) 『忠臣蔵前世幕無』(寛政六年) 『敵討義女英』(寛政七年) 『怪談筆始』(寛政八年) 『作者根元江戸錦』(寛政十一年) 『世諺口紺屋雛形』(寛政十一年) 『竈將軍勘畧卷』(寛政十二年) 『貧福蜻蛉返』(寛政十二年)

享和年間 『昔男生得這奇の見勢物語』(享和元年) 『敵討蚤取眼』(享和元年) 『延命長尺御詵染長寿小紋』(享和二年) 『的中地本問屋』(享和二年) 『人間萬事吹矢的』(享和三年)

不明 『紅皿欠皿往古噺』 『金銀先生皆運先生夢中の印噺』

以上のように、今回、対象とした黄表紙は、前三稿までに対象とした洒落本のうち、明和安永年間から寛政年間までのものと時代的に重なる。

前三稿までの課題は、未だ、解決途上にある。今回、対象とした黄表紙も、やはり、構成が種々様々で、決して、均一ではない。発話体ではないとの理由で、序文や地の文、跋文なども分析対象から外し、発話言語に分析対象を絞ろうとしたけれど、その「発話体」言語には、直接引用体と間接引用体とが混在している。作者・版元の異なりもある。分析対象の選択に未だ種々大きな問題を残していることを、今回も、引き続き、認めざるを得ない。

## 二

前三稿に準じ、連体装定構制の異なりに応じて、<sup>(注5)</sup> 用例を、まず、「A」群と「B」群とに、分類した。用例採否の基準は、前三稿までのそれに、等しい。念のため、以下に、繰り返し、羅列しておこう。

まず、繫辞性を顕わにする「といふ」は、「言ふ」の実質的意義があらわである「といふ」とは、連続を保ちつつも、やはり、文法的には性質を異にと考えられるため、今回も、異なる扱いを、<sup>(注6)</sup> 選択した。

準体法に関する議論が、「体言」の資格を巡る問題である以上、形容詞文的「主語」・動詞文的「格」の構成に与る現象をこそ、まずは、分析対象としなければならぬと考え、助詞「に」が下接する用例に関して、前三稿に続き本稿も、所謂「接続助詞」と判断される用例を、準体法に関する用例群からは、除いた。

その一方で、

忠孝の道はいふに及ばず、聞くにも及ばず、こんな又知れた事もねえもんだ。

のような、慣用型として既に固定化した、あるいは固定化しつつあるものではあっても、接続助詞「に」と目されるものと同様に除外するのは避けるべきであろうという判断から、一応、用例に数えた。

また、同じ慣用型である、「連体形準体法+が+いい」のようなものも、前三稿に同じく、本稿も、一応、数を出してみた。

次のような「慣用型」用例もまた、当該用例に含めた。

逃げるが最後策で尻を叩いてやるぞ。

兎角ずるいが勝ちの世の中で御座ります。

心を入れ替へて辛抱し、兎角寶物を取り戻すが肝要ぢやぞ。

今年ことしは信州善光寺如来の御開帳なれば、これへ祈誓まじりをかけるにしくはなし。

あの哥をきくにつけても、百両の金がほしいなア。

### 三

前節に記した基準で、用例を選別した結果を、以下、示していく。

表①

こそ	や	より	と	も	は	に	を	が			
0	0	0	0	0	13	0	5	2	五段	準	A
0	0	0	0	0	4	0	0	2	上下		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	変格		
0	0	0	0	0	5	0	0	1	五段	「の」	
0	0	0	0	0	2	0	1	3	上下		
0	0	0	0	0	0	0	0	1	変格		
0	0	0	0	0	24	0	6	9	計		
1	0	8	1	16	30	22	2	20	五段	準	B
1	0	2	0	8	10	6	4	11	上下		
0	0	1	0	3	5	1	1	2	変格		
0	0	0	0	0	6	1	4	1	五段	「の」	
0	0	0	0	0	2	0	0	0	上下		
0	0	0	0	0	0	0	0	1	変格		
2	0	11	1	27	53	30	11	35	計		

まず、助動詞が下接しない、裸形の動詞連体形に関する用例は、次の表①のようになった。これは、本稿前節に記したように、「連体形準体法+が+いい」「連体形+の+が+いい」構造、「連体形準体法+によつて」及びそれらの類縁構造を含み、かつ、繋辞性を顕わにした「といふ」類を除いたものである。<sup>(注7)</sup>

計	φ
20	0
6	0
0	0
6	0
6	0
1	0
39	0
100	0
43	1
13	0
12	0
2	0
1	0
171	1

各々の用例を、以下、挙げておく。

A 準体法五段 兎角長い物には巻かれるだから、げぢく共をあやして置くが。智恵さ。

下々の者乍らもよく道を守るを人といふもの、身の行ひ悪い奴は、わんくにやあくといふと同じ事だ。  
禪にはさんであるは小粒ではないか。幸手屋の虱紐とは見えぬく

上下段 向うに見ゆるが硫黄が島、此方に霞かゝると見えけるは釜山海

ぐわらくくぐわらく落ちるはお茶の水

A 「の」五段 日は照るとも、絶えず滔たりく。絶えずに酔ふのが誠のこけよ。

私は忠臣蔵をよみやす。おめへのて読むのは八文字屋物か。

上下段 向うの茶屋の二階に客を待つて居るのが、丁字屋の雛鶴に、鶴やの菅原だ。

雁や鴨が大きな池に凍り付いて居るのを、首をねぢきつては取りく、腰へ付けて出ます。

さてく、今の役者に見るのはない。私共が若い時分は、三條勘太郎、山中平九郎

変格 アレ向うから来るのが玉屋の小紫、松葉屋の瀬川、そのあとの振袖が花扇サ。

B 準体法五段 願のかきがね取れたものは、雪隠のかきがねはずが大事と申して、なんで御座つてなんで御座る。

如何に辨慶、唯今人の申して通るを聞けば、安宅の港に新関を立てて、山伏を固く選ぶとこそ申しつれ。

柏餅でも黒酒でも上りませ。妹めがのぼりをいぢりたがるには困ります。

頭からうまいくと飲むは、味噌ぢやアねえが、おれと隣だらう。

雨のみのわに濡れてぬる、と云ふきどりて降るもいいのさ。

鼻アに鼻毛をのばすと違つて命を延ばすのは手間がとれる。

茄子を使ふは無言つて居るから、張合ひがない。茄子をつかふは、留守をつかふよりつらい役だ。

天道より受け得たる正直正当の素顔にて世を渡ること、人の人たる道なり

上下段 体の濡れるはかまはぬが、着物の濡れるが。いたしぼう大損だ。

嘘の川を渡さば下馬の流るるを待つて、よりくに引き倒すべし。

およそよき大しやうをもとむる二ハ、さやうにてハならず、すにしよくのげんとく、

己の噂をしてくれるは有り難えが、お婆アさんでは恐れる。

あんなに太平楽を云ひなんすを、そばに聞いて居るも余り智恵がねえぢやアおつせんか。

青本も貴様はいつくわのはやり氣ゆゑ、あんな者に添わせるより、色は黒くても、同じ仲間の黒本へ遣れば

質の流れるは利上げも出来るが、命の流れる、仕方がない。

変格 人の世渡りするを餘所目に見れば、あぶなく見えるが、我が身の事には氣が付かぬ。

長生の薬が利きすぎたか。悲しやく。死ぬるにも死なれぬは因果ぢや。

そのやうなものは口元ばかりの学問、然しながら物を読んでその先ばかり穿鑿するは。せぬに劣る。

これは成程その方が申す所理に当れり。前へするも後へするも同じ道理なり。

寵の上塗は、恥の上塗をするより、。ましたの齒入でいひぬる。

B「の」五段 膏薬か腰張か知れぬ。いつそ鏝で塗るのが見よさうな理窟だ。



皆が苦しむのを見ては、少し飲む気がないわい。

とんぢやくはねえ。屁を売るのに何ぞ用心が悪い。奴槍持は大道をひりながらさへ歩くわ。

鼻アに鼻毛をのばすと違つて命を延ばすのは手間がとれる。

上下段 宿を貸したがる人もねえもんだ。薄氣味の悪い。そして獨り旅をとめるのは、法度では御座らぬか。

変格 爰をあけてくれや。鬼の這入るのは、かけ取りの来るのより。ましであらう。

表①のうち、「動詞連体形準体法+が+いい」「動詞連体形+の+が+いい」形式及びその類縁構造の用例は、次のような結果であった。「M」を、勧誘等のモダリティを含むものとして、「非M」を、含まないものとして、各々、示している。

表②

計	非M	M			
			五段	上下	
1	1	0	五段	準	
0	0	0	上下		
0	0	0	変格	A	
0	0	0	五段		「の」
0	0	0	上下		
0	0	0	変格		
1	1	0	計		
16	2	14	五段	準	
4	0	4	上下		
2	0	2	変格	B	
0	0	0	五段		「の」
0	0	0	上下		
1	0	1	変格		
23	2	21	計		

各々の用例を、以下、簡単に挙げておく。  
モダリティ有り

B 準体法五段 お手が鳴つたら銚子と悟り、片手ならして一生を悟るがいい。

上下段 これはとかく、指を切れというてやるがいい。それでソレ、仕打が分らうといふやつさ。

変格 逃げたの内に横木瓜とするかい。

モダリテイ無し

A 準体法五段 出語りは揃ひの社衿、浅黄小袖ははえのあるがい、のお前の役は時致か。

B 準体法五段 「傘を置いて来たから取りに行かざアなるめえ。」「それよりかア菱屋へ行つて、すつぽん煮で飲むがいよ。」

表①のうち、「動詞連体形十に十よつて」は以下のものであった。

表③

によつて	A		B		
0					準
0	「の」	計		0	
4	準	計		4	
0	「の」	計		0	
4	計		計		4

繫辞性をあらわにした「といふ」及びその類縁構造は、次のようになっていた。

表④

計	と	も	は	を	が		
9	1	0	4	1	3	といふ	A
6	0	1	1	1	3	と申す	
1	0	1	0	0	0	と申んす	
1	0	0	1	0	0	と申ます	
17	1	2	6	2	6	計	
11	0	3	7	0	1	といふ	B
0	0	0	0	0	0	と申す	
0	0	0	0	0	0	と申んす	
0	0	0	0	0	0	と申ます	
11	0	3	7	0	1	計	

各々の用例を、以下、簡単に挙げておく。

これを通ひで取りに行く故に雁取帳と云ふをこしらへ、寒國館で其の帳面を改めます。  
 いやな奴だがいい手だ。歌菊と云ふはどんな女だか見たいものだ。

よく道を守るを人の人といふもの、身の行ひ悪い奴は、わんくにやあくといふと同じ事だ。

其の昔人武天皇の御代に、丸山権太左右衛門と申すが御座りましたが、それより一割大きう御座ります。

「御前芥子之助と申すを御覽あせばせ」「ア、路考杜若に萬菊を三ばいづけにしたやうな代物ぢや。」

とうの半つう王ちやく、やぼつていにしるす。「ちやくと申ハ半つう王の名と見へました

A 準体法 ひりりと辛い<sup>い</sup>が山椒<sup>さんしよ</sup>の粉<sup>こ</sup>、ひよろりと長い<sup>は</sup>、たしかな人の足<sup>あし</sup>であんべい。

表⑤

計	と	も	は	に	を	が		
							準	A
8	1	0	5	0	0	2	準	A
9	2	0	2	0	1	4	「の」	A
17	3	0	7	0	1	6	計	
計	と	も	は	に	を	が		
							準	B
23	0	8	3	7	3	2	準	B
2	0	0	1	0	1	0	「の」	B
25	0	8	4	7	4	2	計	

次に、形容動詞をも含めた形容詞用例を扱うことにしよう。

「あづきは後につけたといふのが、ふるいく。」

すなはち化物と申すも、みな心より発る事にて、心たゞしき時は化物にも遭はず  
 アノ宗太夫と申しますは、元もぐさやで御座りやしたが、それはよい声さ。  
 やうきうの名ハきんりといふのさ。てんしさんと申すもぬしの事だそうさ。  
 風引に引返し<sup>ひつかへ</sup>の脈といふのが。ある。これは鍼<sup>はり</sup>を繋ぎに打つてゐねばならぬ。  
 「あづきは後につけたといふのが、ふるいく。」

河では大井河、佛では大佛、橋は兩國橋、長いは三十三間堂、まだく大きなものは数へられませぬ。

小豆の方も黄粉の方も味に違ひは無けれども、うまいとまづいは間夫と客。

「の」紫蘭先生のおぶらつうへも面白かつた。通笑や可笑子のにもふすごいのがあつて。

お汁のあついのをはお替いなされませ。

己が親玉の君子顔も腹の皮だ。君子の悪いのはふんしのわるい猿におとりだ。

仇討の仇の無いのと、唐辛の辛くないと、女郎の情のないのとは、さてくはり合ひぬけのしたものだ。

B 準体法 甚五郎が所の居さふ龍は、よく働く居さふ龍だが、鼻が大きいと思ひやられた

彼奴はなくしきをきらつて、斯の通りの高慢、我等が仲間引き込みませう。

ほんに利く事なら、一袋孫娘にやりたい。彼奴は不人相で縁遠いには困る。

松は辛いと皆おしやんすけれどな命の長いは松の事だ。

人の頼む事をしてくれね尻の重い人だ。大きな棚ツちりだから、尻の重いも尤もだ。

「の」だまり武士や家中武士と、根性が悪ければ、地口まで悪いのを胸に思つて居る。

金の無いのは、首の無いには劣ります。平に此の儀は御無用になされませ。

表⑤のうち、「形容詞連体形準体法十が十いい」「形容詞連体形十の十が十いい」形式及びその類縁構造の用例は、次のような結果であつた。

もう此方へしめかけ山の寒鴉は古いによつて、寒鳶が油揚をさらふやうに、遁げやうく。

表⑦

によつて	<table border="1"> <tr> <td>0</td> <td>準</td> <td rowspan="2">A</td> </tr> <tr> <td>0</td> <td>「の」</td> </tr> </table>		0	準	A	0	「の」
0			準	A			
0	「の」						
0	計						
2	<table border="1"> <tr> <td>2</td> <td>準</td> <td rowspan="2">B</td> </tr> <tr> <td>0</td> <td>「の」</td> </tr> </table>		2	準	B	0	「の」
2	準	B					
0	「の」						
2	計						

表⑤のうち、「形容詞連体形十によつて」は以下のものであった。

モダリティ無し

表⑥

計	非M	M	<table border="1"> <tr> <td>準</td> <td rowspan="2">A</td> </tr> <tr> <td>「の」</td> </tr> </table>		準	A	「の」
準	A						
「の」							
0	0	0					
1	1	0					
1	1	0	計				
0	0	0	<table border="1"> <tr> <td>準</td> <td rowspan="2">B</td> </tr> <tr> <td>「の」</td> </tr> </table>		準	B	「の」
準	B						
「の」							
0	0	0					
0	0	0	計				

四

最後に、助動詞連体形の用例は、次の表⑧のようになった。

表⑧

計	こそ	より	へ	で	と	も	は	に	を	が		
											準	A
21	1	0	0	0	0	3	13	0	1	3	準	A
19	0	0	1	1	0	0	10	1	3	3	「の」	
40	1	0	1	1	0	3	23	1	4	6	計	
計	こそ	より	へ	で	と	も	は	に	を	が		
											準	B
91	2	4	0	0	1	12	27	7	7	31	準	B
4	0	0	0	0	1	0	3	0	0	0	「の」	
95	2	4	0	0	2	12	30	7	7	31	計	

各々の用例を、以下に挙げておこう。

A 準体法

あの便器おかはの類るゑに藤ふじの花はなを書いたが御座ござるが、薄手うすてでよい物もので御座ござる。

随分油断ずいぶんゆだんなく武芸ぶげいを励はげみ、今日衣服こんにちいふくは見苦みくるしくても、具足くそくの一領いちりやうも持ちたるをこそ武士ふしとは云へ。

兄弟たうとが持つて来たは屠蘇袋とろそぶくろと袖そでの梅うめ、そんな酔よを覚おぼますものは入いらねえ。早く持つて下され。

忠常たうつねさま、唯今たういままでは失礼しつれいいたしました。初松魚はつがつをと見みえたも誠まことは鹽松魚しほがつをさ。

さて其その次つぎは、祭礼まつりなどは古風こふうのかはらぬこそ目出度めでたし。

「の」  
血ちの涙なみだは五刃もんめで御座ござります。安やすいのなら、水鼻みづばなをませたのか御座ござります。涙なみだも錢次第ぜにしだいさ。

どうも爺おやぢやお袋ふくろが目慧めざとくつて内うちが出でにくいから、ぐつと寐ねむ氣けの来きそうなのをか二貝かひばかり下くだせえ。

「二三枚書まいかかぬのを交ませておくれ。」  
「とても事の事ことに皆書みなかかないのにしなさい。」

娘むすめが鱸どぢやうになつたのは、格別骨かくへつほねが柔やはらかだらう。

今年ことしから総領そうりやうのはま弓ゆみはやめて、せんど生まれたのへ許ばかりやるとさ。

B 準体法

あまり高慢かうまんに育そだてあげたが、今いまでは大おほきな害がいとなりました。

鬼七奴きしちぬとお福奴ふくぬ、不義ふぎを働はたらきましたを、きつと見届みとけました。

業平なりひらと云いふと見みえて、是こゝれは斯かく綽名あだなを付つけたか。併しかし江戸中えどぢうの女おんなに惚ほれられるには弱よわつたす。

アノ女郎ぢやうらうは全盛ぜんせいごさかんで居ゐるが、多おほくの金かねを吸すい取とられたは皆みなあいつ故ゆゑだ。

はだかの家うちへ道行みちゆきとは太おほきな裏うらはらだ。緋縮緬ひぢりめんのふんどしが、こゝで栄はえたもをかしいく。

葛くわの葉はが障子しやうじへ歌うたを書ゆいたとは違ちがつて、千両せんりやうたゞとり山やまは、身みがあつて面おも白しろい。

油あぶらを取とられるのは、エレキテルで火ひを取とられるよりつらうおつすよ。



蚤にも食はせぬ此の身体。』と云ひしこそ、よき武士の龜鑑なり。」と、

「の」今までうかく、あいらを出して無駄費にされたのは、一生のぢざうそんだ。

太々しいあんな女に馬鹿にされるのとは違はアね。ほんのこつたアつがもねえ。

表⑧のうち、「助動詞連体形準体法+が+いい」「助動詞連体形+の+が+いい」形式及びその類縁構造の用例は、次のような結果であった。

表⑨

計	非M	M	A	
			準	「の」
0	0	0	0	0
0	0	0	計	
0	0	0	計	
計	非M	M	B	
			準	「の」
23	1	22	0	0
0	0	0	計	
23	1	22	計	

各々の用例を、これも、以下に挙げておこう。

モダリテイ有り

助動詞準体法

一番悪星奴にてんじやうを見せつけてやらう。それ早く拾ひごん八としたがいい。

モダリテイ無し

助動詞準体法

兎角人と云ふ者は女には脆いものだから、是れは女に受取らせるがよからう。」と評議して、

表⑧のうち、「助動詞連体形+によって」構造は、次のような結果を得た。

表⑩

によつて	/	
0	準	A
0	「の」	
0	計	
1	準	B
0	「の」	
1	計	

各々の用例を、以下、簡単に挙げておく。

叔も頼朝、義経御仲不和にならせ給ふにより、判官殿主従偽山伏となりて奥へ御下りの由、  
幸ひ近日梶原父子が松島見物に見えるによつて、よく飲込ませ  
其のかはりに其方ら、耳から鼻で苦勞せしに依つて、耳を取つて鼻をかむやうな浅草紙を一帖づゝはずみ

四

それでは、前節までに本稿で報告した黄表紙と、前三稿において報告した、明和安永年間、寛政年間、文化年間以降の各期洒落本とにおける、連体形準体法と「の」準体法、A構造準体とB構造準体との、各々のありかたの比較にうつる。

まず、A構造準体とB構造準体との、それぞれの用例数集計は、以下の通り。

表⑩

黄表紙	洒落本				
	文化年間以降	寛政年間	明和安永年間		
39 (38)	40	80	66	A	動詞裸形
19 (20.4)	7.6 (9.6)	11 (12.5)	17 (22.8)		
171 (148)	488 (375)	648 (559)	323 (224)	B	
81 (79.6)	92.4 (90.4)	89 (87.5)	83 (77.2)		
17 (16)	40	50	39 (37)	A	形容詞裸形
40.5 (39)	47.6 (47.5)	50.5 (54.3)	54.9 (61.7)		
25	44 (42)	49 (42)	32 (23)	B	
59.5 (61)	52.4 (52.5)	49.5 (45.7)	45.1 (38.3)		
40	54	83	78	A	助動詞
29.6 (35.7)	13.5 (17.9)	12.4 (14.8)	23.1 (29.5)		
95 (72)	347 (247)	587 (478)	260 (186)	B	
70.4 (64.3)	86.5 (82.1)	87.6 (85.2)	76.9 (70.5)		
96 (94)	134	213	183 (181)	A	計
24.8 (27.7)	13.2 (16.8)	14.2 (16.5)	22.9 (29.5)		
291 (245)	879 (664)	1284 (1079)	615 (433)	B	
75.2 (72.3)	86.8 (83.2)	85.8 (83.5)	77.1 (70.5)		

この表中、最上段の数字は「連体形（の）＋が＋いい」及びその類縁構造を含むもので、その下段に（ ）で括られたものがあれば、「連体形（の）＋が＋いい」及びその類縁構造を除いたものである。また、各欄内点線下には、その割合を単純に計算した百分率数値を、小数点下二桁目を四捨五入して表記する。この数値は何ら統計処理を施さないうままに計算されたものであり、十分な信頼性をもつものではない以上、概略的な傾向を計る目安として掲げたに過ぎない。次に連体形準体法と「の」準体法との集計を示す。表中の表記及び数値の性格は、表⑩に等しい。

表⑫

黄表紙	本 落 洒				
	文化年間以降	寛政年間	明和安永年間		
182 (159)	409 (296)	578 (490)	329 (292)	準	動詞裸形
86.7 (85.5)	77.5 (71.3)	79.4 (76.7)	84.6 (83)		
28 (27)	119	150 (149)	60	の	の
13.3 (14.5)	22.5 (28.7)	20.6 (23.3)	15.4 (17)		
31	51 (49)	62 (58)	44 (38)	準	形容詞裸形
73.8 (75.6)	60.7 (61.3)	62.6 (63)	62 (63.3)		
11 (10)	33 (31)	37 (36)	27 (22)	の	の
26.2 (24.4)	39.3 (38.8)	37.4 (39.1)	38 (36.7)		
112 (89)	323 (279)	548 (440)	296 (224)	準	助動詞
83 (79.5)	80.5 (78.2)	81.8 (78.4)	87.6 (84.8)		
23	78	122 (121)	42 (40)	の	の
13 (20.5)	19.5 (21.8)	18.2 (21.6)	12.4 (15.2)		
325 (279)	783 (624)	1188 (988)	669 (554)	準	計
84 (82.3)	77.3 (73.2)	79.4 (76.4)	83.8 (82)		
62 (60)	230 (228)	309 (306)	129 (122)	の	の
16 (17.7)	22.7 (26.8)	20.6 (23.6)	16.2 (18)		

本稿第一節に記したように、今回、対象とした黄表紙は、表⑪と⑫における「明和安永年間」「寛政年間」とに、時代的に重なる。

表⑪における明和安永年間から文化年間以降にかけての、「動詞裸形」でのA B両構造の割合の推移、すなわち、A構造が減少し、B構造が増加するという変化の流れに、黄表紙での数値は一致する。ところが、「形容詞裸形」では、その推移に比して、黄表紙での数値は、A構造が低過ぎ、B構造が高過ぎる。逆に、「助動詞」では、A構造の割合が高過ぎ、B構造の割合が低過ぎる。前三稿で確認したA B構造の割合の変化の中で位置づけるなら、「形容詞裸形」では、その変化に先んじ、「助動詞」では、遅れをとっていることになる。全体としては、やはり、A構造の割合が高過ぎ、B構造の割合が低

過ぎるので、やはり、洒落本での変化に遅れていることになる。

次に、表⑫での連体形準体法と助詞「の」による準体法との割合の推移を見てみる。「動詞裸形」「形容詞裸形」とともに、前三稿で確認した洒落本での変化と比べてみると、いずれも、「遅れた」ものである。ただし、全体としては、洒落本での動きに添うたものであるか、ほんの少しばかり遅れ気味の状態である。

表⑪⑫の全体を俯瞰するなら、前三稿での洒落本の動きと比べて、今回の黄表紙の準体法は、それと同じか、少し遅れている状態、と言えようか。単に準体法に限っての事なのか、或いは、洒落本と黄表紙との発話体言語に広く当て嵌まる事なのか、更に分析が必要である。

## おわりに

以上、黄表紙の発話体言語を対象として、近世後期における準体法のありかたを見てきた。

近世期の文学作品を、口語資料として利用する試みが、<sup>(注9)</sup>続けられてきた。前三稿そして本稿の調査分析の結果を、そこに合流させるなら、たとえ発話体言語に限定したとしても、テキストの全てを、「口語資料」として分析することは避けねばならない、ということが、改めて、浮き彫りにされたと言えるだろう。或る種の文法現象を指標として、もっと細かく、テキストの選別を行った上で、少なくとも分析対象作品を、限定する必要が、ある。次稿に期したい。

## 注

(注1)「明和安永期洒落本の準体法」(『女子大國文』第二二八号)、「寛政期洒落本の準体法」(『女子大國文』第一三〇号)、「後期洒落本の準体法」(『女子大國文』第一三二号)。

(注2) 『日本文法論』七六九頁。

(注3) 本稿の連体装定の把握は、拙稿「連体装定の類型と交渉」(川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』)等に述べたとおり。

(注4) 各々、解題・解説に記されている製版年刊行年に従ったが、記述のないものは「不明」とした。

(注5) 注3に同じ。

(注6) ただし、以下のような用例はあまりに慣用型に過ぎてA Bの判定も困難なため、本稿でも、除外することにした。

これといふも人の意見いけんを茶ちやにしたゆへ、色にそやされ、こんななりになられた、

(注7) 表中における「 $\phi$ 」は、助詞の下接しないことを意味する。

(注8) 項目は「A」で出現するものを基準とした。

(注9) 中村幸彦氏「型の文章―近世文学研究における文体論の基礎検討―」(『文学・語学』第四五号 一九六七)。奥村三雄氏「近代京阪語考―順説表現の助詞について―」(『岐阜大学研究報告 人文科学』第一四号 岐阜大学学芸学部一九六五)。小松寿雄氏「近世世話浄瑠璃における武士の言葉―文語性・古語性の検討―」(『埼玉大学紀要』第一巻 埼玉大学教養部 一九七五)。五所美子氏「式亭三馬の言語描写についての一考察」(『語文研究』第二七号 九州大学国語国文学会 一九六九)。矢野準氏「近世後期上方語資料としての上方板洒落本類」(『語文研究』第四一号九州大学国語国文学会 一九七六)。同氏「近世後期京坂語―に関する一考察―洒落本用語の写実性―」(『國語學』第一〇七集 一九七六)。同氏「近世後期京坂語資料としての滑稽本類―尊敬表現を中心に―」(『國文研究』第二二号静岡女子大学国語国文学会 一九七九)。山県浩氏「言語資料としての歌舞伎脚本―敬語辞を中心に―」(『語文研究』第五〇号 九州大学国語国文学会 一九八〇)。などを、たとえば、挙げることができる。

参考文献 本文に記したものを以外を挙げる

川端善明(一九五九)「連体(一)」『国語国文』第二八卷一〇号所収

(一九八六) 「格と格助詞とその組織」『論集日本語研究』1 現代語編

信太知子 (一九六九) 「古代語連体形の構成する句の特質——準体句を中心に句相互の関連性について——」『神女大國文』第七号所収

柳田征司 (一九九三) 「無名詞準体句から準体助詞句(「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」)への変化」

『愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部 人文・社会科学』第二五卷二号所収

山口堯二 (一九九二) 「古代語の準体句構造」『国語国文』第六一巻五号所収

(本学助教授)